

たか  
高

はし  
橋

いずみ  
泉

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 199 号
学位授与年月日	平成17年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期 3 年の課程) 人間科学専攻
学位論文題目	地域社会と「近代化」 —「山村調査」「海村調査」の追跡調査研究対象地を中心 とした比較研究—
論文審査委員	(主査) 教授 吉原直樹 教授 高城和義 教授 正村俊之 教授 嶋陸奥彦 助教授 永井彰

## 論文内容の要旨

### 1. 全体の構成

「近代的なもの＝モダニティ」に至るプロセスとしての「近代化」に関連した課題は多様であり、さまざまな分野からの研究が、それぞれの関心にもとづいておこなわれてきた。序章では、日本の地域社会における「近代化」の問題を分析するための視点と方法について検討した。「近代化」に関する諸問題について論じてきた社会学者に富永健一がいる。富永の近代化論に対してはさまざまに問題点が指摘されているが、2節では、あえて富永の近代化論に焦点をあてて、その論点を整理し、日本の地域社会における「近代化」の諸問題を論ずるにあたって、その方法の利用可能性について考察し、それに加えて、その問題点についても検討した。ついで、3節では、内藤莞爾とR.N.ベラーの研究を取りあげ、それらに対する富永ほかのコメントにもふれながら、日本の「近代化」と宗教の問題について検討し、こうした側面から地域社会における「近代化」の問題を考えるための視点を明確にした。そして、4節では、2、3節をふまえて、日本の地域社会における「近代化」の分析方法について考察するとともに、それらを応用して地域社会の「近代化」の問題を解明する試みのために、柳田国男ほかによっておこなわれた山村・海村調査の追跡調査を資料として取りあげることの意義についても論じた。

I部では、序章で論じた視点と方法にしたがって、日本の地域社会における「近代化」の諸問題を分析した。分析の対象としたのは、昭和時代の山村諸地域である。成城大学民俗学研究所は、柳田ほか

1934（昭和9）年から3年間にわたり、全国66箇所の山村で実施した調査すなわち「山村調査」の50年後における追跡調査を1984（昭和59）年から3年余りにわたって実施した。筆者が参加したこの共同研究すなわち「山村生活50年 その文化変化の研究」の目的は、「山村調査」の行われた1934—6（昭和9—11）年をゼロポイントとして当時の資料を基礎にして、50年後に「山村調査」の対象になった地域のうち21箇所に關して追跡調査を実施することで、50年間の山村地域の生活変化の過程を明らかにしようというものであった。これらの調査対象地域の諸事例を中心に、山村地域社会における「近代化」についての諸問題を、経済、政治、社会、文化の各領域ごとに検討した。

Ⅱ部では、沿海地域社会における「近代化」と宗教についての問題を、三国町と佐賀関町という二つのフィールドに焦点をあてて、これら二つの地域を比較して検討した。これは筆者が参加した成城大学民俗学研究所の共同研究「沿海諸地域の文化変化の研究—柳田国男主導『海村調査』『離島調査』の追跡調査研究—」、すなわち、柳田ほかが1937（昭和12）年から3年間、全国30箇所の離島並びに沿海村落で実施した「海村調査」と、1950（昭和25）年から3年間、全国30箇所余の離島で実施した「離島調査」の50—60年後における追跡調査（1998〔平成10〕年から3年間にわたって15箇所で実施）の成果に基づくものである。

以上の検討結果を順次確認しながら、以下の、2. では、Ⅰ部で行った、富永の近代化の分析方法を用いて、四つの領域ごとに、地域社会における「近代化」の諸問題を分析した結果をまとめ、3. では、Ⅱ部で行った、地域社会における「近代化」と宗教についての問題解明の結果をまとめ、4. では、終章について述べることにする。

## 2. 山村地域社会における「近代化」について

Ⅰ部（1—4章）では以下の通りの検討を行った。1章では、「経済サブシステムにおける近代化 経済活動が自律性をもった効率性の高い組織によって担われて、『近代経済成長』を達成していくメカニズムが確立されていること。」（富永 1990:30）と「経済的近代化を実現する価値は、ウェーバーの意味での『資本主義の精神』としてとらえられる。」（富永 1990:54）という視点から、山村地域社会における経済的領域の近代化について検討した。経済活動を担う自律的・効率的組織として、町や村の自治体が、経済成長を達成する強いリーダーシップをもった組織となっている事例（宮城県筆甫地区・徳島県木頭村ほか）、森林組合や農業協同組合などの各種組合がリーダーシップをもち、経済活動の中核を担ってきた事例（三重県森地区・和歌山県上山路地区ほか）、その他1章で取り上げた諸事例を検討した結果、経済活動を担う自律的・効率的組織は、各地域に多様な形で存在するし、それらのさまざまな組織が「近代経済成長」達成の一翼を担っており、そうしたメカニズムは各地域において一定程度形成されているとみてよいとした。次に、経済的近代化を実現する「資本主義の精神」という価値は育っているかという点については、高城和義が、パーソンズは、「資本主義の精神の核心は、天職を義務と考えることにある」として、それが労働倫理であり、合理的・倫理的・方法的生活態度であることを強調する、と述べているような（高城 2003:47）、ウェーバー的、パーソンズ的な意味で正確には「資本主義の精神」とはいえないかもしれない。しかしながら、職業労働に献身する精神ということに関していうならば、調査対象各地域の人々のなかに一定程度それが存在することが確認できるのである（詳細については1章、要点は同章まとめを参照）。

2章では、「政治サブシステムにおける近代化 政治的意志決定が大衆的レベルにおいて民主主義的基盤の上に乗るようになり、またその実行が専門化された高度の能力をもつ官僚制組織に担われるようになること。」（富永 1990:31）と「政治的近代化を実現する価値は、資本主義の精神とパラレルな意

味で『民主主義の精神』としてとらえられる。」(富永 1990:55) という視点から、山村地域社会における政治的領域の近代化について検討した。前者の視点に関しては、第一に、政治的意志決定が大衆的レベルにおいて民主主義的基盤の上に乗るようになっていくかどうかについて、第二に、政治的意志決定の実行が合理性をもつ組織に担われるようになっていくかどうかについてという二点に分けて検討した。第一の点については、「おもだち」など特定の家の人を中心とした村の組織紐帯は切れ、民主的な村運営へ移行した事例(新潟県東川地区・青森県赤石地区ほか)、第二の点については、地主層などが役職を独占していたのが、現在では村の指導者は能力で選ぶようになった事例(茨城県高岡地区)、村の組織の運営は「おもだち」などが取りしきっていたのが、合議制へと変化した事例(青森県赤石地区・和歌山県上山路地区ほか)、その他2章で取り上げた諸事例を検討した結果、第一と第二のいずれの点についても、一定程度肯定できるとした。後者の視点に関しては、前述のように、少数の上層階層が上意下達的に支配していたものが、戦後は自治組織などが民主化され、合議によって運営されていくようになったことが、一般的な傾向としてみられる。また、重大な問題に関して、村を二分するような論争と対立に発展した場合、最終的には多数派の意見が採用され、問題解決がはかられていくプロセスをみることができると述べているが(高城 2003: 57)、こうした「草の根民主主義」が機能していたからであるとして述べているが(高城 2003: 57)、こうした「草の根民主主義」が、調査対象各地域に存在するわけではないが、いくつかの地域には、重大問題に関して、多数決で問題解決をはかっていこうとする姿勢がみられることは、アメリカと単純な比較をすることはできないが、ある種の民主主義的要素のめばえとはいえないだろうか。以上のことを考慮して、「民主主義の精神」は、そのめばえのようなものであるにしても、地域によっては存在するといってもよいのではなかろうか(詳細については2章、要点は同章まとめを参照)。

3章では、「社会的(狭義)サブシステムにおける近代化 社会集団が、血縁的紐帯からなる包括的で未分化な親族集団から、機能的に分化した目的組織として親族集団からの分離において形成されるようになり、また地域社会が、封鎖的な村落ゲマインシャフトから、開放的で都市度の高い地域ゲゼルシャフトに移行することによって、機能分化・普遍主義・業績主義・手段的合理主義などの制度化がすすむこと。」(富永 1990:31)と「社会的近代化を実現する価値は、資本主義の精神および民主主義の精神と平行に考えるならば、『自由・平等の精神』としてとらえられる。」(富永 1990:56)という視点から、山村地域社会における社会的領域の近代化について検討した。前者の視点に関しては、第一に、集団レベルで、血縁的で未分化な集団から分離して、機能的・目的組織的集団が形成されること、第二に、地域社会レベルで、封鎖的な村落ゲマインシャフトから、開放的で都市度の高い地域ゲゼルシャフトに移行すること、第三に、制度レベルで、機能分化・普遍主義・業績主義・手段的合理主義化が進行することという三点に分けて検討した。第一の点については、現在の地域社会には、さまざまな近代的な機能集団が存在することは明白であるが、そうした近代的な機能集団よりも、伝統的集団、なかでも血縁的集団と地域集団とに焦点をあてて検討した。いくつかの事例をあげると、宮城県筆甫地区の伝統的な地域集団としての契約講は、契約に基づき運営される複数の機能をもった目的組織ともいえるものであるが、伝統的習俗も内包しており、両義的性格をもった集団の事例である。茨城県高岡地区の大字の下位集団としての地縁集団であるツボは血縁的集団と重複的になることがある事例である。岡山県上刑部地区のカブウチという本分家集団は、実質的には集団としての独自の機能を有していない。組は町行政の末端に位置づけられており、さまざまな機能を担っているが、伝統的な要素のなかで、現在も組に残るのは、葬儀と祭祀の共同のみという事例である。こうした検討の結果、血縁集団のなかでも同族的結

合は衰退し、地域集団は伝統的な要素を残存させながらも自治組織としていくつかの機能をもった両義的な目的組織となっているということがいえるとした。第二の点については、まず、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行がどの程度みられるかということについて検討し、次に、封鎖性から開放性への移行の程度がどうであるかという点について検討した。前者については、まず、共同労働について、不必要になったものを除けば、共同労働そのものは、各地域において持続している。次に、相互扶助について、機械化などによって、不必要になったものは消滅したが、葬式の手伝いなどは組を中心に、各地域において持続している。こうした検討の結果から、戦前と比較すると、村落のゲマインシャフト的要素は明らかに弱体化しているが、ゲゼルシャフト的要素の増大するなかで、ある程度は残存していると考えられるとした。後者については、道路が整備された結果として、村の外に働きに出る者が増え、村が封鎖的な状態から開放的な状態へ移行した事例（新潟県東川地区）、高度経済成長が、青年層の都市への流出を促し、結果的に村を都市に向けて開放させることになった事例（三重県森地区）などから、高度経済成長期以降の村落社会の封鎖性は希薄になり、外社会への開放性を強めたと考えることができるとした。第三の点については、新たな社会集団が形成されている事例（岡山県上刑部地区・徳島県木頭村ほか）などから、伝統的な諸集団が衰退あるいは消滅の傾向にあるのに対して、機能分化した新たな集団が形成され、村落組織の運営方法と役職者の選出に関して、本人の能力次第（茨城県高岡地区）、区長の名誉職的意味合いは失われた（新潟県東川地区）事例などから、個別主義から普遍主義へ、生得的地位の重視から業績主義へ、伝統的手法から手段的合理主義への変化をある程度みることができるとした。次に、後者の価値の視点に関しては、まず、平等の精神という価値については、各地域の事例から、戦後は自治組織が民主化され、合議により運営がおこなわれていくようになったこと、また、農地改革と民主化政策の結果として、平等化が一定のレベルまで進行したことなどにより、平等の精神についても一定のレベルまで育っているとみてよいのではないだろうか。次に、自由の精神という価値については、血縁的、地縁的むすびつきによる拘束からの自由という側面から考察すると、新潟県東川地区の、家同士の関係が本家中心主義から各戸中心主義へと変わったという事例は、血縁的、地縁的むすびつきによる拘束からの自由をある程度実現したことをあらわしているようにも思われる。また、鹿児島県輝北町では、かつてのつきあいは家単位だったものが、新たな社会集団の形成にもなってきた新しいつきあいは、個人単位になったという。この事例からは、家の拘束から個人の自由な意志による人間関係の形成をみることができるようにも思われるのである。こうした事例があるとしても、ゲマインシャフト的要素の残存により、それが十分に育っているとはいえないであろうが、ゲゼルシャフト的要素の成長により、この側面においても変化は確実に現れていると考えてよいのではないだろうか。これらの点を考慮すると、「自由・平等の精神」という価値がある程度育っているとみてよいのではないだろうかとした（詳細については3章、要点は同章まとめを参照）。

4章では、「文化的（狭義）サブシステムにおける近代化 人間の思惟によって作りだされシンボルによって客観的に表現されている諸文化要素のなかで、とりわけ科学および科学的技術の制度化がすすみ、それらが自律的に進歩するメカニズムが社会システムそのもののうちにビルトインされていること、ならびに教育が普及することによって、迷信や呪術や因習など非合理的な文化要素の占める余地が小さくなっていくこと。」（富永 1990:31）と「文化的近代化を実現する価値は、これを以上の三つの価値（資本主義の精神、民主主義の精神、自由・平等の精神）とパラレルに考えるならば、『合理主義の精神』としてとらえられる。」（富永 1990:56）という視点から、山村地域社会における文化的領域の近代化について検討した。これらの視点に関しては、第一に、諸文化要素のなかでも科学および科学的技術の制度化がすすむこと、第二に、迷信や呪術や因習など非合理的な文化要素の占める余地が小さくなっ

ていくこと、第三に、文化的近代化を実現する「合理主義の精神」という価値は育っているかという三点に分けて検討した。第一の点については、1章で論じた経済的領域の近代化のなかに、さまざまな事例をみいだすことができるが、4章では文化要素のなかでも信仰や儀礼といったことに直接結びつく事例だけを取り上げて検討した。山での神秘的な体験について、山仕事の減少、道路の整備、車やマスメディアの普及などにより、そうしたことを合理的、科学的に解釈するようになった事例（宮城県筆甫地区）、昔は大病するとオイセ踊りをして病気平癒を願ったが、戦後、医学の進歩によって、祈祷をしなくなり、雨乞いは、天気予報の普及により、やらなくなり、虫祈祷は、農薬が普及するとやらなくなった事例（高知県禰原町）、病院出産の普及にともない、産の忌みが失われ、産屋の行事もなくなった事例（青森県赤石地区）などから、交通手段、マス・メディア、保健医療、気象情報、農業技術といった科学的技術の制度化がすすむことにより、科学的知識が増大し、伝統的習俗が変化したことをみてとることができるとした。第二の点について、病気や不幸があったとき、呪術宗教的職能者のもとに行くことは現在でもあるとする事例（宮城県筆甫地区・茨城県高岡地区ほか）、不思議な超自然体験について、若い世代には少ないというが、現在でも、消滅はしていないという事例（高知県禰原町）など、こうした諸事例は、各地域における迷信や呪術や因習など非合理的な文化要素の残存を示している。しかし、病気や不幸に際して呪術に頼るといっても、現在では、現実的な対処をしたうえで、なお不安な部分を呪術に頼るのであり、非合理的なものみに依存し、合理的な対処のしかたをまったくしないというのではない。俗信についても、話は伝えられていても、完全に信じている者はそうはいない。禁忌なども確実に薄れているが、死という不確実なものへの不安のためか、葬送に関する禁忌は各地において比較的残存している。したがって、迷信や呪術や因習など非合理的な文化要素は各地域に残存しているが、それらの日常生活に占める余地は、戦前と比較すると、確実に小さくなっているとした。第三の点については、村外部から合理的考え方が流入し、通り神などがなくなったという事例（三重県森地区）、前述した病気平癒の祈祷、雨乞い、虫祈祷、産の忌みといったものの科学知識の普及による消滅の事例、月経をけがれとする意識の希薄化という事例（和歌山県上山路地区・岡山県上刑部地区）などから、各地域における文化的領域には、伝統的な習俗が残存しているにもかかわらず、合理的考え方は着実に流入しており、非合理的な文化要素が残存しているなかにあっても、「合理主義の精神」という価値は一定程度育っているといつてよいとした。ただし、これまであげてきた諸事例からもわかるように、それにもかかわらず、非合理的要素もまた根強く残存しているのである（詳細については4章、要点は同章まとめを参照）。

以上の検討結果から、山村地域社会において、(一) 経済的領域における近代化は、農地改革ほかの戦後諸改革期とその後の高度経済成長期に急激に進んだ。そして、経済的近代化を実現する「資本主義の精神」という価値、いいかえれば、職業労働に献身する精神は、調査対象各地域の人々のなかに一定程度存在することが確認できた。といつても、もちろんそれが、調査対象各地域に普遍的に存在するといっているのではない。ある種の労働倫理、合理的生活態度が一部の人々のなかに存在するという程度の意味においてである。(二) 政治的領域における近代化は、農地改革ほか戦後の民主化政策の過程で進んだ。そして、政治的近代化を実現する「民主主義の精神」という価値は、調査対象各地域の人々のなかに、一部にゲマインシャフト的要素を残存させながらも、一定程度形成されていることが確認できた。このことについても、西欧的な意味でのデモクラシーが、調査対象各地域に根付いているといっているのではない。あくまでも、日本近代化の歴史的流れのなかで、戦前の上意下達の村落組織のありようが、戦後は合議制に転換し、しだいにそれが根付いていったということの意味しているにすぎないのである。(三) 社会的領域における近代化は、農地改革ほかの戦後諸改革期とその後の高度経済成長期に進ん

だ。そして、社会的近代化を実現する「自由・平等の精神」という価値について、平等の精神については、一定のレベルまで形成されている。自由の精神については、ゲマインシャフト的要素の残存により、十分に形成されているとはいえないにしても、変化は確実に現れている。このことから、「自由・平等の精神」という価値は、調査対象各地域の人々のなかに、ゲマインシャフト的要素を残存させながらも、ある程度形成されていることが確認できた。これについてもやはり、前述したように、平等の精神とは、戦前の「おもだち」による支配形態から、戦後は各戸が比較的对等に近い状態に変化してきたことをさすのであり、自由の精神というのは、血縁的、地縁的むすびつきによる拘束からの自由という側面から考察しているものであり、そうした拘束を残存させながらも、変化していることをさすのである。(四) 文化的領域における近代化は、戦後、とくに高度経済成長期前後における交通・情報手段の発達、科学的知識の増大により、一定のレベルまで進んだが、人生儀礼や年中行事のなかには合理化された要素がある一方で、伝統的要素も残り、俗信、呪術的要素の残存もみられる。そして、文化的近代化を実現する「合理主義の精神」という価値は、非合理的な文化要素が残存しているなかにあつて、合理的考え方の流入により、一定程度形成されていることが確認できた。それは、祭礼等の営為に合理化が進行していったことだけをさすのではなく、忌みの観念の希薄化、俗信を信じる意識の弱まりといったことなどを含めて、合理主義の精神の一定程度の形成を確認できたといっているのであるが、しかし、その一方で、呪術宗教的要素の残存や、そうしたものへの信仰や恐れといった意識の存在は、けっしてなくなつてはいないという事実も、忘れてはならないことである。

以上のような、全般的な合理化過程の進行とともに、非合理的要素の残存というアンビバレントな状況を認識しておかなければならないだろう。そうしたことをふまえながら、以下のことを述べておきたい。

経済・政治・社会・文化という四領域ごとの、「近代化」の進行の程度は、経済的領域において最も進んでおり、ついで政治的領域と社会的領域において進み、文化的領域において進行程度は最もゆるやかであるといえることができる。したがって、「経済>政治>社会—文化」(富永 1990:65)という「近代化」の進行程度の図式は、I部において検討した調査対象各地域の諸事例についても、おおむね、該当するといえよう。ただし、分析の対象が、全体社会ではなく、地域社会であったという研究対象の特性から、政治的領域と社会的領域を必ずしも明確に区別しえなかつたことと、これら両領域の「近代化」の進行程度が比較的同じようなレベルであったことから、今回の調査対象各地域の分析結果からするとこの「近代化」の進行程度の図式は、「経済>政治—社会>文化」としたほうが適切のように思われる。全体社会における「近代化」の進行程度の図式は、「経済>政治>社会—文化」であると考えられるが、地域社会におけるそれは、「経済>政治—社会>文化」であると思われる。しかし、いずれにしても、これらの図式は、単純化しすぎているきらいがあり、錯綜する現実の変化の過程を、これだけで分析するのは問題があるだろう。

### 3. 沿海地域社会の「近代化」と宗教について

II部(5—7章)では以下の通りの検討を行った。5章では、福井県三国町安島地区を事例として取り上げて、地域社会の「近代化」と宗教について検討した。この地域は、仏教の側面からみると、真宗信仰が極めて強い。真宗は、他宗派に対して非妥協的な傾向を有するが、真宗信仰と神社行事は両立してきた。民間信仰、特に俗信についてはどうかというと、戦前の『採集手帖』には、海に関する俗信の記述がみられるが、その一方で、神頼みや呪いの類はしないという答もみられる。海に関する俗信があるなかで、一方、そうした俗信にこだわらないで対処していこうとする合理的な考え方が同じ地域の

人々のなかに存在することは、「呪術世界における合理化」の一つの好例といえよう。

6章では、大分県佐賀関町を事例として取り上げて、5章と同様の検討を行った。この地域も、真宗の門徒数が、他宗派と比較すると相対的に多く、他宗派と真宗との対比で、呪術的要素と非呪術的要素の混在がみられる。神社に関しては、呪術的要素を持った現世利益的な祈願や行事がみられ、祭礼に関しての忌みの観念や潔斎の慣行が残存し、真宗以外の仏教諸宗派は、例えば、ハマセガキという呪術的要素を含む現世利益的、儀礼的な民俗行事に関与するのに対して、真宗の寺院は原則として関与しない。この点に関して、祈祷・呪術などを認めない真宗の教義的立場は貫徹されていて、他宗派の立場とは対照的である。しかし、真宗もこの行事に対して、必ずしも完全に否定しているわけではなく、地区によっては真宗寺院からも伴僧が参加しているし、真宗の門徒が大半を占める地区でも行われており、真宗の仏教婦人会が担い手の一部を構成している地区もみられる。また、門徒のなかにはハマセガキを希望する傾向もみられる。そうした点はあるにしても、真宗の呪術的信仰と一線を画そうとする姿勢は他宗派と比較して際だっているといえよう。つまり、この地域の宗教には、呪術的要素と非呪術的要素の混在がみられ、真宗は後者の担い手であり、その教義は必ずしも徹底しているわけではないが、呪術的な民間信仰の存在する地域のなかで、信仰における合理性の橋頭堡を築いているように思われる。こうした状況は、「呪術世界における合理化」のもう一つの例といえるのではないだろうか。

7章では、三国町と佐賀関町の比較検討を行った。両町とも宗教面では真宗が強い地域であるという共通性があるが、その共通性に焦点をあてながら、両地域の特徴を比較し、さらに、真宗の強い二つの地域社会において、民間信仰、なかでも俗信はどのように取り扱われているのかを比較検討することにより、真宗と俗信との関係を追求した。両地域は、同じように真宗地帯にありながら、地域社会の宗教生活に対する真宗の影響力には多少違いがあるように思われる。門徒数でみた場合、三国町における真宗は仏教各宗派に対していわば安定的多数を占める状況にあるが、佐賀関町のそれはいわば相対的に多数であるにすぎず、真宗・浄土宗・禅宗が共存しながら互いの信仰を守っている状況にあるともいえる。そうしたことが両地域の俗信のあり方に微妙な影響を与えているように思われる。両地域ともに海に関する俗信などがみられるが、とくに三国については、神頼みや呪いの類はしないという記述が散見される。高齢の海女の話の中などに、確信をもって俗信を信じない意識がみられる。戦前の段階で、すでに俗信を信じるよりも、生活や人生に対して、合理的に対処していこうとする意識や態度が目立っている。一方、佐賀関においても、真宗の教義は必ずしも徹底しているわけではないが、呪術的な民間信仰の存在する地域のなかで、信仰における合理性の橋頭堡を築いているように思われる。こうしたことは他の地域と異なる真宗地帯の特徴であるように思われる。

以上の検討結果から、以下のことがいえる。三国町は北陸門徒地帯に位置し、真宗信仰が極めて強い地域であるが、にもかかわらず、真宗信仰と神社行事は両立しており、また、海に関する俗信も存在する。しかし、真宗信仰はこの地域の人々の人生観や生活規範に一定の影響を与えており、戦前の段階ですでに、合理的な考え方が、人々の意識のなかに存在することは、「呪術世界における合理化」の例といえる。佐賀関町は中北部九州門徒地帯に位置し、真宗の門徒数が、他宗派と比較すると相対的に多いが、三国ほどではない。この地域では、呪術的要素と非呪術的要素の混在がみられ、真宗は後者の担い手であり、その教義は必ずしも徹底しているわけではないが、呪術的信仰の存在する地域のなかで、信仰における合理性を維持していることは、やはり、「呪術世界における合理化」の例といえる。両地域は、同じ真宗地帯にありながら、地域社会の宗教生活に対する真宗の影響力には強弱の差があり、また、呪術的信仰の強弱にも差がある。しかし、いずれにしても両地域には、呪術的信仰が散在しており、そのなかであって、信仰における合理化を真宗が担っているといえるのである。「呪術世界における合理化」と

は、このような状況をさすものではないだろうか。

#### 4. 結び

最後に、序章で提起したところの、「呪術世界における合理化」という視点にたったならば、「多くの呪術的要素を残している日本においても、宗教的価値の合理化が近代化の原動力になり得る。」という説への解答を試みたい。前述のように、文化的領域、とくに信仰に関連するような部分には、非合理性や呪術性はその一部に残存する。しかし、そうした部分においても宗教的営為と価値の合理化は進んだ。例えば、別々に行われていた祭が、合祀・同時祭へと転換し、組織も簡略化されていった新潟県東川地区の例、祭の担い手の都合で、祭日に変更された石川県若山町の例、各種の講を、戦後に合併して年一回の祀りに変更した長野県美和地区の例など、祭礼の営為が、人々の経済生活に従属するかたちで、変更され、合理化された例はほかにも各地にみられる。こうした宗教的営為の合理化は、宗教的価値のレベルにおいても合理化がおきていることによって引き起こされ、営為の合理化の結果として、さらに価値レベルの合理化も進行するように考えられる。また、宗教的価値の合理化は、各種の宗教的営為にともない厳格に守られてきた忌みの意識の希薄化にも顕著にあらわれているといえる。このような宗教的営為と価値の合理化は、祭や宗教的行事よりも、その担い手の経済生活を優先させることにより、生産性を向上させている。つまり、宗教的価値の合理化は、経済的領域の近代化を促進する要因の一つになっているのである。そうした意味で、宗教的価値の合理化が「近代化」の原動力になり得るのである。「呪術世界における合理化」、つまりそれは、呪術性を残存させながら、生活が合理化の方向に進んでいくことといいかえられると考えるのだが、そうした流れのなかにある日本の地域社会の現状は、「多くの呪術的要素を残している日本においても、宗教的価値の合理化が近代化の原動力になり得る。」という説に対する、一つの証明になるのではないだろうか。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、かつて柳田国男らが1934年および1937年から3年間にわたっておこなった「山村調査」「海村調査」の調査研究対象地（前者は全国66箇所、後者は30箇所）の50—60年後における地域社会の変化を、著者自らが加わった成城大学民俗学研究所の追跡調査結果によって得られた知見をベースに据えて、主に富永健一の近代化論にたいする修正仮説の樹立の上に包括的かつ時系列的に示したものである。

本論文は、全体として序章、I部、II部、終章から構成されている。序章では、日本の地域社会における「近代化」に関連して問題の所在と方法的枠組みが提示されている。I部では、50年間の山村地域の変化の過程が富永のいう「近代化」の過程としてとらえかえされ、経済、政治、社会、文化の領域ごとにその内容が検討されている。II部では、海村地域の変化の過程が二つのフィールド（福井県三国町安島地区および大分県佐賀関地区）に焦点化されて、「近代化」と宗教という問題構制の下で検討されている。終章では、以上の展開を踏まえた上で、再び序章の問題提起に立ち返って合理化の内実が「脱魔術化」と「再魔術化」の関連に即して検討されるとともに、いくつかの課題が提示されている。

まず序章では、先行研究のモダニティ概念、とりわけハーバーマス、ギデンス、ハーヴェイ等のそれらを著者の視点で整序している。その上で日本の地域社会における「近代化」の過程に座を据えるにあたって富永の近代化論がきわめて有益であること、また日本の「近代化」と宗教をめぐる議論に際して内藤莞爾とR.N.ベラーの研究にたいする富永の争論がきわめて秀逸であることを指摘している。そし



て本論文の第1章以下の山村および海村地域の変化をみる際の準拠点が、事実上、富永の近代化論に据えられることが宣言される。

そこでI部では、富永の近代化論にしたがって、第1章で経済的領域の近代化、第2章で政治的領域の近代化、第3章で社会的領域の近代化、第4章で文化的領域の近代化、の内容が順次検討に付されている。具体的には第1章では、経済活動を遂行する自律的／効率的組織が各地域において跳梁し「近代経済成長」の一翼を担うようになっていること、第2章では、自治組織の民主化、合議制による運営の浸透が一般的にみられること、第3章では、同族的結合が衰退して、地域集団の自治組織としての編成替えがすすんでいること、第4章では、「合理主義の精神」という価値が広くゆきわたるようになっていることが明らかにされる。そして山村地域の50年間が「経済>政治>社会—文化」とする富永の全体社会次元での「近代化」の進行図式によって概ね説明できるものの、厳密には地域社会次元での「経済>政治—社会>文化」の進行図式に準拠すべきであることが述べられている。同時に、そうした図式に山村生活の変化がすべて解消されてしまうわけではないことを指摘している。とりわけ、文化的領域の近代化に関連して、「合理主義の精神」の一定程度の進展／浸透を認めつつも、呪術宗教的要素が未だ強固に残存していることに注意をうながしている。この点は、II部における問題意識にも引きつがれている。

次にII部では、I部の議論とパラレルに地域社会の「近代化」の内容が、5章で福井県三国町安島地区、6章で大分県佐賀関町をそれぞれ事例対象地として、特に宗教との関連で検討されている。いずれも真宗信仰が広くゆきわたっている地域ではあるが、5章ではさまざまな俗信がなお存在するなかで、そうした俗信を離れて合理的な考え方をする人が数多く存在すること、そして6章では、呪術的要素と非呪術的要素の混在がみられるなかで、真宗が後者の担い手となることによって信仰における合理性の橋頭堡を築いていることが観取されている。著者は以上の状況を「呪術世界の合理化」のいうなればステロタイプとして注目している。さて続く第7章では、ともに真宗信仰がきわめて強いという共通性の確認からはじまって、民間信仰、とりわけ俗信と真宗との間にいかなる関係がみられるかという観点から上述の二地区の比較がなされる。そこでは、同じ真宗地帯でありながら、地域社会の宗教生活にたいする真宗の影響力はけっして一様ではないこと、また呪術的信仰にもバリエーションがあることを明らかにしている。にもかかわらず、著者によると、両地域はともに真宗が事実上信仰における合理化の担い手となっているのである。著者はこうして真宗地帯が地域社会の「近代化」にとってきわめて親和的であったことを強調している。ここでも、富永の近代化論が下敷きになっていることは明らかであるが、同時に「呪術世界の合理化」を過度に単純化してとらえることには距離を置いているようにみえる。この点は終章の結論部において、序章の議論を豊富化する形でより明瞭に論じられている。終章では、I、II部の展開を受けて、山村地域、海村地域の過去50—60年間の生活の変化が、大枠として「経済>政治—社会>文化」の「近代化」のプロセスをたどり、畢竟、「呪術世界における合理化」を達成していることが確認される。そしてそのことが結果的に「多くの呪術的要素を残している日本においても、宗教的価値の合理化が近代化の原動力になり得る。」とする著者自身の説を下支えするものになっている、つまり地域社会の側から証明するものになっている、と結論づけている。同時に、著者は「呪術世界における合理化」という視点に立って日本の地域社会の「近代化」の諸相を分析する立場を、近年、論壇に華々しく登場している「再魔術化」というタームを向こうにして推敲しようとしている。この部分は、本論文の全体からすれば紙数としてほんの微々たるものでしかなく、また試論的段階にとどまっているが、本論文にたいする著者自身の自己評定とともに課題意識を含むものとなっており、興味深い。そこでは、「脱魔術化が同時に再魔術化であるという構造」を確認した上で、自己の立場を明らかにしようとしている。それは起点とした富永の近代化論に寄りつつも、それを相対化しようとする可能性をはらむ

ものである。換言するならば、本論文における鍵概念である「呪術世界における合理化」の理論射程を「再魔術化」というタームの〈解説〉を介して再措定しているともいえる。「現代社会の日常的秩序において共存している『脱魔術化』と『再魔術化』の『すみわけ』のありようを、宗教的領域に限定せず、広く社会・文化的領域にわたって探求していきたい」とする、本論文の末尾の言葉は、本論文が結果として地域社会と「近代化」というテーマにたいして、直線的な歴史像に加担しない、より推敲された変動論への視座を準備しつつあることを示している。

これまで、地域社会と「近代化」というテーマで具体的なフィールドを設定して地域社会の全体像を明らかにしようとしてきた個別研究はないわけではないが、50 — 60年におよぶ地域社会の変化を包括的、体系的に明らかにしているという点で本論文は秀でている。たとえば、近代化にともなう地域社会の変化を明らかにした古典的名著であるといわれるヤンキーシティ・シリーズやミドルタウン研究でさえ、追跡調査の射程は本論文に到底およぶものではない。しかも本論文は経験的研究の領野で「近代化」を「呪術世界の合理化」の過程として統合的に追求することに成功しており、その成果は斯界の発展に寄与するところ大である。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。